

ハワイに渡った日本人「写真花嫁」たち

— 最初の「写真花嫁」から最後の「写真花嫁」まで —

Life Histories of Japanese “Picture Brides” in Hawaii:
From the First “Picture Brides” to the Last

柳 澤 幾 美

Ikumi T. YANAGISAWA

1. はじめに

「写真結婚」とは、見合い結婚の変形であり、海外に移民した男性と母国にいる女性との間で写真や手紙の交換で結婚に至る方法のことである¹⁾。日本人女性移民は、「写真結婚」という方法によって結婚したということで、アメリカ合衆国（以下、「アメリカ」と表記）において「写真花嫁 (Picture Bride)」というレッテルを付与された。筆者は、先に、ハワイにおける「写真花嫁」問題について、日本政府の対応を中心に考察した²⁾。本稿では、彼女たちの生活史を中心に考察したい。

周知のとおり、ハワイは日本から最初の本格的な移民が1885年に渡った土地である。ハワイは1894年にアメリカ支配の共和国となった。1898年にはアメリカに併合され、1900年にアメリカの正式な準州 (territory) となった。アメリカ50番目の州となったのは、1959年のことである。そのためか、アメリカの移民史から除外されることが多かったように思われるが、ハワイも、アメリカの一部であるならば、その移民史に含まれなければならないであろう。

ハワイは、例えば、1900年当時のハワイにおいて総人口に占める日本人移民の割合が

39.7%で、最大のエスニック・グループであったことなどから、日本人移民の歴史に関して、アメリカ本土とは異なった側面も多く見られると考えられる。また、後に述べるように、ハワイは、アメリカへの最初の「写真花嫁」が上陸した地であるとも考えられ、さらに最後の「写真花嫁」が渡ったのもハワイであった。それらを考慮しながら、ハワイの「写真花嫁」問題、及び「写真花嫁」と呼ばれた日本人移民女性の歴史について考察することは、意義のあることであると思われる。

ハワイの「写真花嫁」に関する先行研究には、拙稿の他に、管見の限りでは、アリス・ユン・チェ (Alice Yun Chai) の研究³⁾がある。ハワイ出身の日系三世女性、カヨ・マタノ・ハッタ監督により、映画、『ピクチャー・ブライド』⁴⁾も作られ、話題をよんだ。また、パッツィ・スミエ・サイキは、ハワイへの日本人移民女性のうち、傑出した女性たちについて、詳しく紹介している⁵⁾。本稿では、ハワイ大学のオーラル・ヒストリー・コレクションを主に一次資料として使用し、「写真花嫁」と呼ばれたごく普通の日本人移民女性たちの、主に1924年までの生活史を考察することを目的とする。

2. ハワイと日本人移民

(1) ハワイ略史と日本人移民－1908年まで

ハワイは、同じアメリカとはいえ、アメリカ本土とは移民後の生活がかなり異なる。最初にハワイの略史とハワイにおける日本人移民の歴史を簡単に述べておきたい。

1868年、明治政府の許可を得ないまま、ハワイ王国の駐日総領事、ユージン・M・ヴァン・リードは、横浜で集めた149名をハワイに送った。彼らは「元年者」と呼ばれた。その中には、女性も5人含まれており、1人の女性はそのままハワイに住み着いた。また、1885年に日本から初めて本格的な海外への移民が始まったのは、ハワイであった。日本人移民の渡航の仕方で区分すると、1885年から1893年までの政府間条約での移民、官約移民時代（9年間）、1894年から1899年まで、私設移民会社の取り扱いによる私約移民時代、1900年から1907年までの自由移民時代、そして「写真花嫁」たちが呼び寄せられた1908年から1923年までの呼び寄せ時代に分かれる。官約移民時代から私約移民時代へ変わったのは、ハワイ王国が消滅したため、政府間の契約ではなく、移民会社による移民事業に移ったからである。

ハワイの主要産業は1920代までは砂糖黍産業で、白人宣教師の子孫などのエリート白人によって経営されていた。つまり、当時のハワイ社会は、少数の英米に出自を持つ白人が、社会の政治経済を全て支配する特殊な社会であった⁶⁾。そういった白人の農園主たちは労働者を「モノ」として扱っていたという。そして、わざとさまざまな民族を混ぜ合わせ、先にプランテーション労働者として入っていた中国人の賃金を抑えるため、日本人労働者の輸入を開始した⁷⁾。

日本からの移民は1900年まではハワイの砂

糖黍プランテーションでの契約移民であった。契約は通常3年間で、労働者の立場は極めて弱く、白人経営者から苛酷な扱いを受けた⁸⁾。契約期間中はプランターに割られた持ち場と仕事場から勝手に離れることができず、砂糖黍畑では炎天下で1日10時間、朝6時から夕方4時まで、製糖工場では12時間の仕事を1ヶ月に26日間しなければならなかった⁹⁾。官約移民時代には20,069人がハワイに渡り、そのうちの5,799人が女性であった。また、自由移民時代の移民は計20,208人が渡り、その中の女性の数は明確にはわからないが、少なくとも5,715人はいた¹⁰⁾。彼女たちの多くは夫に伴ってハワイに渡った女性たちであり、夫たちと共に、砂糖黍プランテーションでの労働に従事したのであった。1894-5年には、ハワイの日本人人口は約2万3千人に達しており、大多数は地方の耕地に就労する契約労働者と、契約満期後の自由労働者であった。

アメリカが1898年にハワイを併合し、1900年にハワイがアメリカの準州となってからは、契約労働は廃止され、この年から日本人はすべて自由移民となった。労働が過酷なことは変わらなかったが、労働者側は移動の自由を持ち、これまでよりは有利な強い立場となり、日本人の集団抗争力は増大した¹¹⁾。それまでも労働紛争はあったが、より組織化し、頻発するようになった。アメリカ本土の日本人移民たちと違った点は、先にも述べたように、日本人移民はハワイにおいて最も人口割合が多い民族集団であったということと、早い時期から労働紛争が存在したことである。1920年までに、2回に渡って大規模なストライキが起こったが、他のエスニック集団との連帯がなかったため、成功しなかった¹²⁾。

表1 ハワイにおける日系人男女別数

	男性数	女性数(日系人全体における割合)	計	米本土の日系人全体における女性割合
1900	47,508	13,603 (22%)	61,111	4.0%
1910	54,784	24,891 (31%)	79,675	12.6%
1920	62,644	46,630 (43%)	109,274	34.5%
1930	75,008	64,623 (46%)	139,631	41.1%

出典：Eleanor C. Nordyke, *The Peopling of Hawaii*, 2nd ed., Honolulu: University of Hawaii Press, 1989, p.194.より作成。

1900年からの日本人移民の数は表1のとおりで、アメリカ本土と比べて、早い時期から女性の割合が高いのがわかる。この中には、19世紀末から20世紀初頭にかけてハワイ渡った日本人売春婦も存在した¹³⁾。

1900年以降、ハワイからアメリカ本土へ渡る日本人が急増し、1902年から1908年までに35,278人も日本人が渡った。アメリカ本土西海岸における日本人排斥運動や、ハワイの農園経営者たちの労働者不足の危惧もあり、1907年、米国政府は、ハワイやメキシコ、カナダ行きの旅券でアメリカ本土に入国することを禁ずる航禁禁止令を発布した。また、1908年にかけて日米間で交わされた「日米紳士協約」では、日本からハワイへの労働の移民に対しても旅券の発給が停止された。

(2) 「写真花嫁」たちの移民

1908年の「日米紳士協約」では、一般の移民は禁止されていたが、すでに移民している

表2 「写真結婚婦人」呼び寄せ証明発給数・渡航数

	証明書発給数 (ホノルル)	実際渡航数 (ホノルル)	アメリカ本土 証明書発給数
1915	1,684	967	1,145
1916	1,459	1,065	1,092
1917	1,662	1,394	1,244
1918	1,392	1,071	1,471
1919(10月まで)	985	780	1,078
合計	7,182	5,277	6,030

出典：『米国二於ケル排日問題雑件写真結婚廃止問題第一巻』外務省外交史料館所蔵史料3門8類2項339-11号より作成

者の両親、妻子の呼び寄せは許されていた。妻を置いて渡米した男性は妻を呼び寄せた。独身の男性たちは日本に一時帰国をして女性と「見合い」をし、妻を伴ってアメリカに再び戻った。それ以外の多くの男性は、「写真結婚」方式によって結婚をした妻を呼び寄せた。こうして日本人移民たちは家族を形成していった。これ以降、本土と同様、ハワイにいる日本人男性移民の妻として海を渡る日本人女性たちの数が急増した。彼女たちこそが「写真花嫁」と呼ばれた日本人女性移民たちなのである。

どのくらいの「写真花嫁」たちがハワイに渡ったのだろうか。ホノルル総領事によると、表2のとおり、1911年から1919年10月までにハワイに渡る「写真花嫁」移民への呼び寄せ発給数は、7,182人で、そのうちの5,277人が実際に渡航している。一方、ノーダイク(Eleanor C. Nordyke)によると、1911年から1919年の間に「写真花嫁」としてハワイに到着した数は9,841人となっている¹⁴⁾。また、オド(Franklin Odo)とシノトー(Kazuko Sinoto)によると、1908年から1924年に日本からの移民が禁止されるまでにハワイに入った日本人男性の数は、27,738人、女性が32,000人で、それら女性のうちのおそらく2万人以上が「写真花嫁」であったろうとしている¹⁵⁾。

「写真花嫁」として移民した女性たちは、港で夫と初めて会い、1913年まではホノルル港でキリスト教式での集団結婚式を挙げていたが、それ以降はそれぞれの宗教に従って各自で結婚式を挙げた。また、1917年以降は、その結婚式も執り行う必要がなくなった¹⁶⁾。アメリカ本土では「写真花嫁」に対する非難が強まり、政治的に利用され、結局日本政府は、「写真花嫁」として

移民する女性たちへの旅券交付を自主的に停止した¹⁷⁾。しかし、ハワイはその対象外となったため¹⁸⁾、ハワイへはその後も、1924年の移民法で日本からの移民が完全に禁止されるまで、「写真花嫁」たちは渡り続けた¹⁹⁾。

3. 最初の「写真花嫁」たち

外務省外交史料館の外交史料の中に、最初の「写真花嫁」として登場するのは、1905年1月、サンフランシスコ港に到着した伊木コツルという女性であった²⁰⁾。ところが、ハワイでは、その2年も前の1903年、複数の日本人移民のカップルが波止場の検疫所にて合同で結婚式を挙げたことが『やまと新聞』（ハワイ）に掲載されている。それによると、検疫所で合同結婚式を挙げたのは、山口県出身の8組、鹿児島県出身1組の合計9組であった。彼らは、ハワイに移民した日本人男性の「妻」として夫たちに呼び寄せられ、ハワイに到着した日本人女性と、その夫たちであった。彼らは現地の移民特別検査局長、ブラウン、結婚免許状係官、ゼームス・ボイトら立ち会いのもとで、日本人牧師、本川源之助の司式により、米国の法律に従ってキリスト教式の結婚式を挙げている。その他に、港に男性が来なかった女性が7人いたが、男性が到着次第、同様に結婚式を挙げるとも書かれている²¹⁾。新聞に掲載されている名簿を見ると、男性は1人39歳の者がいるが、それ以外はさほど高い年齢ではない。また、女性は、10代が2人で、残りは20代である。年齢差は、最も大きい者で18歳離れているが、平均すると7.9歳であり、それほど年齢差があるわけでもない。

立ち会った移民特別長官ブラウンは日本人カップルたちに次のように述べた。

結婚は軽率にはできるものではない。

双方とも夫婦となって愛し合い、何時

までもかわらぬという意思がなくてはならない。諸君は書面上だけで結婚をえてきたのであるが、今ここにきてあの人なら嫌だなどというようなことはないか、無理に結婚する必要なきように、その意思を聞くわけである。²²⁾

夫婦達は一組ずつ結婚証明書に係官の前で、結婚の意思があると述べた上で、結婚証明書を交付された。また、結婚式に立ち会った、本川牧師は、結婚の大切さを説き、同時にハワイでは日本人の売春で風紀が乱れていることを説明し、彼も結婚の意思を改めて確認している。そして、これで晴れて、アメリカの法律上も夫婦になったとしている²³⁾。

この港での結婚式の理由について、記者は、次のように理解を示している。

別項にもある如く九組の夫婦は日本の戸籍に立派に夫婦になつてゐる（ママ）上に当地でもまた米国の法律に従つて結婚式を挙げたのである。其の趣意は法律上の手続きと云ふ事よりは醜業婦の予防が根本になつて居るのである、今迄醜業婦の輸入は大概夫婦なる名目の上に行れて居たので、米国来住民当局者は此際大に之れを防ぐ為め殊に当地から呼寄せて見知らぬ男女が結婚するには、米国の法律に従つて結婚式をせぬ以上は之れを夫婦と認めぬと云ふ事に志した訳なのである²⁴⁾。法律上から云へば日本で認めたものが当地で認められぬは不都合である。然しながら醜業婦輸入の点が重なる点であるとして見れば、予輩は格別に之れに大不服を唱ふる必要もないと思ふ。結婚を重んずるは高尚なる道徳の要求であつて、本川牧師が切つに此の点に就ひて重きを置ひて新夫婦に節操の鏡となれと云つて居られたのは至極同感である。²⁵⁾

アメリカでは1875年の「ページ法（Page Act）」により、外国からの売春婦の入国が禁止されていた。ハワイでは、日本人の売春婦が問題になっていた²⁶⁾。売春婦としてハワイへやってくるのは、偽装結婚をして入ってきた女性が多かったことから、呼び寄せの妻達がそうではないと証明するために、このように到着港でアメリカ式の結婚式を行うことが要求されたと考えられ、新聞でもそのことについては、この時点では好意的な論調である。しかしながら、後に、このキリスト教式の集団結婚式は、『ハワイ報知』の創始者、牧野金三郎により批判され、1913年には取りやめられている²⁷⁾。

この記事では、単に「呼び寄せ」としか書かれていないが、改めて結婚式を行って結婚の意思の有無を確かめる、などと書かれていることから、彼女たちは結婚のために海を渡ってきた女性たちであるのがわかり、「写真結婚」による女性たちであったかもしれない。その後ハワイでも、そしてアメリカ本土でも、「写真花嫁」として呼寄せられた妻たちは港で集団結婚式を行うことになるのであるが、その先駆的な例であるといえる。

1964年発行の『ハワイ日本人移民史』（布哇日系人連合協会）には、次のように書かれている。

ハワイでは、1904年4月までは「写真結婚」を法律上完全なものとして取り扱い、「写真花嫁」たちは日本での花嫁の入籍によりハワイに移民している男性の正式な妻として入国していた。しかし、同年5月以降、ただ入籍したばかりでは合法的な結婚として認められないとして、当時のハワイの結婚法に従い、移民局内で牧師本川源之助が礼式により改めて結婚式を挙げることになった。²⁸⁾

しかし、先に紹介した『やまと新聞』に掲載された例は、それよりも1年前のことである。また、実際の「写真結婚」は、さらにもっと以前に行われていた可能性もある。いずれにしても、アメリカ本土も含め、この『やまと新聞』の集団結婚式は、「最初の『写真花嫁』」の集団結婚式の例の可能性が高い。

4. ハワイの日本人移民女性たちの生活史

船の上からこっちを見て、みんな叫んでいました。「ダイヤモンド・ヘッドだ！ダイヤモンドだ！」って。それで、私は思いました。「まあ、あれがダイヤモンド・ヘッド！」でもそれは、マノアにあるどこかの家のガラス窓が反射していただけなんです。それがきらきら輝いていたんです。みんながほんとのダイヤモンド・ヘッドを私に教えてくれたとき、私は言いました。「どこがダイヤモンドなの？」だって、何にもきらきらしていなかったんですから。²⁹⁾

農家出身のミヨ・アスカは、ホノルルに到着したときのようすをこのように象徴的に語っている。希望を持ってハワイへやってきた日本人女性たち。彼女たちを待っていたのは、そこでのどんな生活だったのだろうか。ハワイで、彼女たちはダイヤモンドを見つけることができたのだろうか。ハワイには、彼女のように無名の日本人女性たちが3万人以上渡った。

先にも述べたように、ハワイの傑出した一世女性については、パッツィ・スミエ・サイキが詳しく紹介しているので、ここではごく普通の日本人移民女性たちの生活史を扱う。一次資料としては、主にハワイ大学マノア校附属図書館のハワイコレクションからのオーラル・ヒストリーを利用する。

(1) なぜハワイに来たか

ハワイへ移民した日本人女性たちは、どのようにしてハワイへ来ることを決めたのだろうか。オーラル・ヒストリーから、ハワイへ来た理由を探ってみる。アメリカ本土と共通するところもあるが、ハワイという独特の土地柄も窺える。

広島農家の出身のミヨ・アスカは、父の知り合いの仲人でハワイから嫁探しに帰ってきたアスカ氏と会った。そのときのようすを次のように語っている。

私の父の友人がアスカ家の知り合いだったんです。それでその人がアスカをうちに連れてきたんです。私の顔を見に来たんです。その人たちが来たとき、私はたまたま縁側で縫い物をしていました。たまたま私の友達が縫い物を習いに来ている。(中略)で、彼女が「もしあの人が甘日市の人だったら、あれはアスカ家の息子よ。」彼女はアスカの近所に住んでいたから知っていたんです。私を見に来たんだろうって、友達が言うのです。³⁰⁾

彼をどう思ったかについては、よく見なかったからわからず、結婚式のときに初めて見たと答えている。彼女たちは、結婚後にハワイにやってきたが、その理由は、夫の実家が食堂を営んでいて、それが好きではなかったからだという。そして、こうも言っている。

私はいつもアメリカに行きたいと思っていたんです。私にはアメリカにいる叔父が3人いるんです。叔父がいるから、アメリカに行きたかったんです。だけど、ハワイへ行くとは思わなかった。若かったからね、外国に行きたかったんです。³¹⁾

「写真花嫁」として1914年にハワイにやってきたウメ・ムラカミは、このように言う。

仲人がうちにやってきて、父に娘さんをハワイにやってもいいかって聞いたんです。父は、私がよければいいって。(中略)私は若かったからすごく心配でしたが、みんながハワイへ行くなんていいねって言うもんだから、ハワイって、どんなところだろうって思ったんです。ここに来るまで心配だったけれど、何ヶ月かして、ほんとに常夏の国で。(中略)日本では四季があるけれど、ここは何て楽なんだろうって³²⁾。

実家が稲作農家だったクメ・オカノは、農家が嫌いだったと語る。

私は農業が嫌いだったんです。私は農業しないような、お店かなんかある所に行きたかったんです。でも、私をほしいっていうお店なんてなかったんです。(中略)ハワイはたぶんいい所だと思って、喜んでやってきたんです。やっぱりいい所でしたよ³³⁾。

ところが彼女は結局コーヒー農園で働くことになり、後には経営するようになる。

1920年に「写真花嫁」として滋賀県からハワイへ渡った、マキ・ナカムラの場合、夫になる男性の写真が送られてきたときのことをこう話す。

(彼は男前だったかと聞かれて)いい男だったんだから、「はい」と答えておきます。(写真と実物は)同じくらい、いい男でしたよ。³⁴⁾

マキ・ナカムラには両親がいなかったが、この縁談が仲人によってもたらされた後、彼女の兄が相手の男性の家を調べに行き、その男性がかつて軍人だったことがわかったのだという。このように、「写真結婚」でも通常の見合い結婚と同じように、「家」同士の結婚であったので、お互いの家を調べることが普通になされていたようである。

(2) 「写真花嫁」たちの出発と到着

1913年に「写真花嫁」としてホノルルに到着したオサメ・マナゴは、船が到着してからしばらくして、ホノルルまでやってきた夫と初めて会った。そのときのようすをこう語っている。

その日がやってきたとき、私は夫の写真と私の写真を見せました。誰かが、おでこの広い男性と、もう一人ちょっと背の低い男性がいるとあって、どちらが私の夫かと訪ねました。私は夫の写真を持っていたので、彼にそれを見せました。彼は、「ああ、こっちか。頭がよさそうな、おでこの広い方だな。この男はビジネスマンの雰囲気がある。」そして私たちは顔を合わせ、カツマさんがお互いを紹介してくれました。彼は、私ははるばるハワイまでやってきたのだから、お互いにいたわりあって、しっかり働くようにと言いました。そして、そこで、私達の手をお互いに握らせました。そこを離れてから、私たちは出雲大社に行き、神主さんの前で式を挙げ、私たちは杯を交わしました。それから、フクオカ屋に行って、(ハワイ島へいく)船を待つて、二日間そこで過ごしました。³⁵⁾

夫についてどう思ったかについては、こう答えている。

何て言ったらいいかしら。私は彼に言ったんです。私はあなたと結婚するためにわざわざ日本から来たんですよ。³⁶⁾

結局は、「どう思ったか」という答えにはなっていないが、これは日本人移民女性がハワイに渡ってきた理由をそのまま表している。まちがいなく、彼女たちのほとんどは、「結婚するために」渡ってきたのである。

1914年に「写真花嫁」としてハワイに到着したウメ・ムラカミは、ホノルルに到着したときの身体検査について、こう語っている。

はい、身体検査がありました。私はすぐに通りました。ここ、アラモアナの移民局では... そこで一晩過ごさなきゃなんなかったんです。一泊させられたんです。私は鉤虫はいなかったんですけど、その当時は目の検査をして、お腹の中の虫を調べるんです。私は鉤虫は持っていなかったんですが、回虫がいたので、一晩泊まらなければならなかったんです。だから、私は移民局の2階で一晩過ごしました。私だけじゃなくて、ほとんどみんなそうだったと思います。³⁷⁾

身体検査は、ときには「写真花嫁」たちの大きな心の負担となっていたという。知らない土地に到着し、一晩でも移民局に泊まらなければならなかったことは、どれほど不安な気持ちになったであろうか。

(3) 日本人移民女性たちはどのように働いたか？

先に述べたように、ハワイの主要産業は1920代までは砂糖黍産業で、日本人移民女性の多くも、最初は砂糖黍プランテーションの耕地労働者として働いた。例えば、契約移民が廃止される直前の1900年1月11日付で交わされた砂糖黍プランテーション労働者の移民労働契約書を見ると、夫婦二人の名前が記載され、12条に渡る契約条項が書かれている。それによると、賃金は毎月15ドル、妻には毎月10ドル支払われ、屋外では10時間、屋内では12時間労働、休日は新年1日、クリスマス、11月3日、そして日曜日とアメリカの祭日、とある³⁸⁾。同じ労働をしていても、性別によって、また民族ごとにも賃金が違っていた。契

約労働や小作を夫とともにしている場合には、一世女性たちは、ほとんどすべての耕地労働に自ら従事したという。例えば、くわで耕地を耕し雑草をとる「ホエ・ハナ」、雑草をとる「カライ」、砂糖黍の茎から枯れ葉を取り除く作業の「ホレホレ」、種キビを切る作業の「プラプラ」など、男性と肩を並べて炎天下での厳しい労働をこなしたのである³⁹⁾。砂糖黍プランテーションで作業をする日本人移民や中国人移民、フィリピン移民たちを、「ルナ」と呼ばれる、鞭を持った現場監督が見張っていた。「ルナ」には、ポーランド系の男性が多く、乱暴者も多かったという。このような苛酷な労働から、「ホレホレ節」と呼ばれる、作業歌が生まれた。歌の節は、広島県の俗謡、「朶すり唄」からきているといわれ、内容は労働者の苦労を表現したものや、自由を求める系、性関係、怠け者の実態などであった⁴⁰⁾。例えば、次のような歌である。

ハワイ ハワイとヨ
夢みてきたが
流す涙は
キビの中⁴¹⁾

砂糖黍プランテーション以外の農地で働いた日本人移民女性たちもいた。1907年にハワイにやってきたクメ・オカノは、コナのコーヒー農場で働いた。働き始めた理由をこう語っている。

コーヒーが熟してきたとき、みんなが私にコーヒーを摘みに行くといいよっていうので、オオバヤシさんのところに行きました。1日に50セント稼げるって。もし50セントを日本に送ったら、1ドルくらいの価値になる。だから、私はコーヒーを摘みに行ったんです。⁴²⁾そして、細かい骨の折れる労働の様子をこのように象徴的に語っている。

コーヒーは小さな果物なのよ、だから

私たちは朝早く起きて、小さな粒を一つずつ摘む。一日で一袋のときもあるし、二袋のときもある。それを3日間置いといて、それから挽きました。それで水とまぜて次の朝それを洗って、網の上で一週間くらい乾かすの。そんなふうにして乾かした高級コーヒーは、5ドルくらいになる。昔だったから、値段はすごく安かったから、お金を貯めるのは大変だったけれど、私たちは根性でコーヒーを摘んだ。⁴³⁾

一世女性たちは、1910年代ごろから次第に他の職業に進出するようにもなった。例えば、新しく興隆してきたパイナップル産業、家政婦やサービス業、衣服産業などに就いた。また、当時多かった独身男性のため、料理、洗濯、裁縫など、家庭で収入を得られる仕事もやった⁴⁴⁾。1910年代には、ワイキキに白人向けのホテルが建設され、そこで仕事をする日本人女性たちも増えた。1914年に夫と共にワイキキにやってきたミヨ・アスカは、子どもが生まれてから働き始めた。最初は何ができるかわからなかったが、やがてホテルの庭で働く夫が、客の洗濯物を持って帰るようになった。それで、洗濯業をやり始めたのである。

あのころのシャツの襟は硬くてね。襟もそでも。最初はとてもむずかしかった。近所に教えてもらいに行ったんです。それで、やっとうまくできるようになって、稼げるようになったんです。⁴⁵⁾

子どもはおんぶしながら仕事をしたという。夫がワイキキのホテルでウェ이터をやっていたウメ・ムラカミは、結婚後2～3ヶ月は専業主婦をしていたが、その後日本に帰国した女性の代わりに、ホテルで掃除、洗濯、料理などをやるようになった。

言葉がわからなかったから、支配人が

ジェスチャーを使うの。あのころのことを思い出すとおかしくって。その人は、私にジェスチャーを教えてくれたんです。床を掃くように言うときは、ほうきを持ってきて、こうやって掃くジェスチャーをするの。⁴⁶⁾

砂糖黍プランテーションの労働とはかなり違った印象があるが、このように、1910年代以降は、町で働いた女性たちも多かったのである。

1920年にマウイ島にやってきたマキ・ナカムラは、夫が政府関係の仕事で働くかたわら、自分は豆腐屋を始めた。たまたま住んだ家の前の持ち主が豆腐屋だったからだという。

誰か（前に住んでいた人）がやっていたんですよ。女の人がやっていて、道具やなんかを置いていって、夫に続けたいなら、って。それで、豆腐の作り方を教えてもらいました。簡単でしたから。（中略）たくさん売れました。私はざるに豆腐を入れて、10マイルも家から家へ売り歩きました。始めはいっぱい歩きました。豆腐の値段は10セントでした。（中略）運転をしてくれる人がいて。女の人で運転できる人は多くなかったです。助産婦のツチャさんくらいでした。⁴⁷⁾

こうしてマキ・ナカムラは、車で豆腐を売り歩いた。ときには、学校から帰ってきた子どもたちも手伝った⁴⁸⁾。

お産のようすについては、オサメ・マナゴは次のように語る。

結婚した後、最初の子どもを身ごもりました。ウォレイス夫人（雇い主の妻）がお産のことは心配いらないからって言うてくれて、どうしたらいいか、教えてくれました。お産の間中、ウォレイス夫人がずっといっしょにいてくれて、腰をもんでくれて、赤ちゃんが生

まれる時、ここが痛むんだと教えてくれました。（中略）助産婦さんが来て、うしろからこうやって抱いて、心配ないからって、どうすればいいのか教えてくれました。それで、助産婦さんが私を座らせた後、赤ちゃんが生まれたんです。ほんとうに痛くて、腰を切り取ってしまいたいくらいでした。（中略）1週間くらい休んでから、少しずつまた働き始めたんです。⁴⁹⁾

最初のお産の後、1週間くらいで仕事に戻ったというのである。

以上のように、女性たちは実によく働いている。これはアメリカ本土の日本人移民女性もそうであったが、ハワイでも、大部分の日本人移民女性が働いている。ここでも、一世たちの家庭は、女性の労働なしではなりたたなかったのである。

(4) 最後の「写真花嫁」

1923年6月26日にホノルルに到着した、熊本県の農家出身のテラモト・タマが最後の「写真花嫁」の一人であったと言われている⁵⁰⁾。先にも述べたように、1920年に日本政府が「写真花嫁」移民への旅券発給を中止したとき、ハワイは除外されていたのである。彼女は自分がハワイに来ることになった経緯について、このように語っている。

私が「写真花嫁」になったことについては、私の一番上の兄の妻が私の夫の叔母で、それでハワイのニシムラの義父が息子の嫁を探しているって言うてきたんです。それで、そのおばさんが私をハワイへやろうって。でも、私の母が、私は末っ子だから、もし年取って自分が病気になったときに、嫁はいるけれど、自分の娘に看てもらう方がいいからって、私がハワイへ行くこと

を反対したんです。でも、兄の妻が、もし私を行かせてないんなら、自分が西村家に帰るって言いました。それでどうしようもなくて、私をハワイへ行かせたんです。(中略) 姉がほんとは行く予定だったんですが、姉は別の話があってアメリカに行ったんです。(「写真花嫁」になることについては) 何にも思わなかったです。日本では、両親が言う通りにするだけです。⁵¹⁾

彼女は、自分が行きたいからハワイに来たとは言っていないが、いやなのに無理矢理とも言っていない。親に言われた通りではあるものの、後の話によると、姉もアメリカへ嫁いでいたということもあり、ハワイへ嫁ぐことに関して、それほど抵抗なかったようである。

タマは、横浜港から日本を出国するときのようすをこのように語っている。

寄生虫のための十二指腸検査と目の検査がありました。(「読み書きテストはありましたか」という質問に対して) ええ、ありました。学校の教育は何年間受けたかを書いた紙がありました。例えば、6年間だったら、6年生のものを読まされました。(中略) それは、ほんとにそんなにおもしろくありませんでした。どこを読ませられるか、わからなかったんです。例えば、蒸気機関が発明された部分を取り上げて、彼らはこう言うんです。「ここを読め！」私が、それは蒸気機関の発明のことですと言うと、彼らは「よし！」と言うのです。何人かの人、ひどく時間がかかっていました。あちこちでつかえていました。⁵²⁾

日本人の「写真花嫁」に対しては、到着港での「読み書きテスト」は除外されていたが、ハワイへの「写真花嫁」たちに対して、出発

前にこのようなテストが行われていたのである。タマは、目の検査や寄生虫の検査も無事に済み、横浜から出発した。船には、熊本、広島、福岡から9人の女性が乗っており、すべて呼び寄せであったという⁵³⁾。

タマは、1923年6月26日にホノルル港に到着し、しばらく検疫所に滞在した。港にはハワイに住む姉が来ていた。1週間くらい、毎日来てくれたという。というのは、夫はホノルルから遠いラナイに住んでいたため、ホノルルに彼女を迎えに来るのが遅れたからである。港で夫に初めて会ったときのこと、そして結婚式について、こう語る。

私は何にも思いませんでした。夫は父親といっしょに来たんです。(中略) (結婚式は) ホノルルの出雲大社で挙げました。それからホノルルの姉のところに4~5日いました。⁵⁴⁾

彼女は到着港での検査などについて何も語っていない。もちろん、「読み書きテスト」もなかったし、港での集結婚式もなく、ホノルルの出雲大社で結婚式を挙げたのである。

その後、1924年の移民法改正により、アメリカ本土と同様、ハワイへも日本からの移民が禁止された。1924年6月28日ホノルルに入港した臨時船笠戸丸を最後に、日本人の移民は全面的に姿を消した⁵⁵⁾。

7. むすびにかえて

以上、ハワイに渡った「写真花嫁」たちの生活史を見てきた。まず、「写真花嫁」たちは到着港で結婚式を挙げることでアメリカ本土への入国を許されていたが、実はハワイではその先駆的事例ともいべき例があったことがわかる。また、1920年にアメリカ本土への「写真花嫁」たちの移民が禁止された後も、ハワイは除外されていたため、「最後の」「写真花嫁」も、ハワイへ渡った女性であった。

先にも触れたように、ハワイの社会構造は、一握りの英米を出自に持つ白人が政治経済を支配し、それ以外の者はプランテーションで奴隷に近い扱いを受けるという、独特のものであった。本土のような排斥もないほど、労働者たちは下位に置かれていたとも言える。それは、本土とはまったく違った経験を日本人女性たちにも与えた。ハワイへやってきた女性たちの生活は、最初はそのようなプランテーションでの苛酷な労働に挑戦するものであった。しかしながら、見てきたように、ハワイに移民した日本人女性は、無理矢理仕事をさせられたというよりは、概して進んで自ら稼ぎたいと思って仕事をしているようにも感じられる。

アメリカ本土と同様、ハワイへ渡った日本人女性たちは、そのほとんどが「結婚のために」渡ってきた女性たちであった。アメリカ本土と異なるところは、夫と違う仕事をしている者も多かったということと、日系人が多く集中していたため、本土ほど孤独感にさいなまれなかったということである。ハワイの「写真花嫁」たちの生活史を辿ると、運命に果敢に挑戦する日本人移民女性たちのたくましさや力強さを感じる。アメリカ本土に渡った日本人移民女性たちに比べて、比較的悲愴さが伝わってこないようにも感じられる。

このように、同じアメリカではあるものの、ハワイはアメリカ本土とは異なった経験が幾つか見られる。「写真花嫁」であったことや、きつい労働のことを語るにしても、どこか明るさを感じるのである。それは、常夏の島、という気候上の理由と、全体に占める日本人移民の割合が非常に高かったことも理由であろうし、また、ハワイ特有の階級構造が存在したことも大きいのではないだろうか。

本稿では、ハワイの日本人移民の特徴である、砂糖黍プランテーションでの労働につい

での日本人移民女性たちの経験に触れられなかった。また、それにより、アメリカ本土との際だった差異が充分示されなかったが、今後の課題としたい。

註

- 1) 一般にはこれは日本人移民たちの結婚のことであると認識されているが、実際には日本人移民たち以外でも「写真花嫁」は存在した。例えば、朝鮮半島出身の「写真花嫁」たちも存在したし、1922年7月3日付の *New York Times* には"231 Picture Brides on Wedding Liner"と題する記事が掲載され、トルコ、ルーマニア、アルメニア、ギリシャなどからの「写真花嫁」たちが紹介されている。また、日本政府は「写真花嫁」問題が最も大きな外交問題となった1919年には、「写真結婚」の範囲を「写真を交換した有無にかかわらず、夫の在米中に日本で結婚を済ませたもの」という広い範囲で定義している（内田康哉外務大臣より沖縄県知事宛電報「写真結婚ノ範囲ニ付指示ノ件」1919年（大正8年）12月17日付、外務省外交史料館所蔵史料3門8類2項339号-11『米国ニ於ケル排日問題雑件 写真結婚廃止問題』第一巻。
- 2) 柳澤幾美「ハワイにおける『写真花嫁』問題—日本政府の対応を中心に」、『金城学院大学論集』社会科学編、第1巻第1・2合併号、2005年3月、pp.180-193。
- 3) Alice Yun Chai, "Picture Brides: Feminist Analysis of Life Histories of Hawaii's Early Immigrant Women from Japan, Okinawa, and Korea," Donna Gabaccia ed., *Seeking Common Ground, Multidisciplinary Studies of Immigrant Women in the United States*, pp. 123-138. その他に、チェの「写真花嫁」に関する先行研究には、Alice Yun Chai, "Women's History in Public: "Picture Brides" of Hawaii," *Women's Studies Quarterly* 1988: 1&2, pp.51-62.; Alice Yun Chai, "A Picture Bride from Korea: The Life History of a Korean American Woman in Hawaii," *Bridge, An Asian American Perspective*, Winter 1978, pp.37-42.がある。チェはこれ以前に、日本、

- 朝鮮半島、沖縄からの「写真花嫁」たちをインタビューしたビデオテープを編集している。(Picture brides[videorecording]: lives of Hawaii's early immigrant women from Japan, Okinawa and Korea/written and produced by Alice Yun Chai, Barbara F. Kawakami, 1986.)
- 4) Miramax International, 1994. 工藤夕貴が主演した。
- 5) パツツイ・スミエ・サイキ (伊藤美名子訳) 『ハワイの日系女性—最初の100年』秀英書房, 1995年を参照のこと。
- 6) 高木真理子 『日系アメリカ人の日本観—多文化社会ハワイから』淡交社, 1992年, p.52。
- 7) ロナルド・タカキ (阿部紀子・石松久幸訳) 『もう一つのアメリカン・ドリーム』岩波書店, 1996年, pp.26-27。
- 8) ハワイ日本人移民史刊行委員会編 『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会, 1964年, p.124。
- 9) 高木真理子, 1992年, p.31。
- 10) 『ハワイ日本人移民史』1964年, p.119及び pp.146-147より計算。
- 11) 『ハワイ日本人移民史』, 1964年, p.124。
- 12) その後, 1930年代半ばからハワイの労働者が連帯して育てた労働組合, ILWU (International Longshoremen's and Warehousemen's Union) は, 第二次大戦後すぐに大規模なストライキを成功させている。
- 13) ハワイの初期の日本人売春婦については, 宮本なつき 「契約移民時代のホノルル日本人社会と日本人売春婦」『比較社会文化研究』九州大学大学院比較社会文化学府, 第12号, 2002年, pp.47-57を参照のこと。
- 14) Eleanor C. Nordyke, *The Peopling of Hawai'i*, 2nd edition, University of Hawaii Press, Honolulu, 1989, p.66.
- 15) Franklin Odo, Kazuko Sinoto, *A Pictorial History of the Japanese in Hawai'i 1885-1924*, Bishop Museum Press, Honolulu, 1985, p.75.
- 16) 詳しい経緯については, 柳澤, 2005年を参照。
- 17) 詳しくは, 柳澤幾美 『『写真花嫁』移民禁止の経緯—日米外交の視点から』, 『移民史研究年報』, 第10号, 2004年3月, pp.97-107を参照。
- 18) 「写真花嫁」移民への旅券発給を日本政府が停止したとき, ハワイが除外されたことについては, その数が本土に比べて多いからと現地新聞に書かれている。しかし, 表2を見てわかるように, 本土とはそれほど大きな差はない。その除外について, 日米の政府間の交渉の中では取上げられておらず, また, 日本の外務省側の史料にも出てきていないが, 推察してみると, ハワイではアメリカ本土西海岸地域のような日本人に対する排斥運動は起こっておらず, また, カリフォルニア州の「外国人土地法」も無関係である。そのため, 日本政府が自主的に「写真花嫁」移民を禁止する措置からは除外されたのではないかと考えられる。
- 19) 柳澤, 2005年参照。
- 20) サンフランシスコ領事上野季三郎より特命全権公使高平小五郎宛書簡「伊木勘次郎及同コツル兩人ノ結婚ニ対シ合衆国移民官ガ無効ノ主張セン件」1905年2月7日, など, 外務省外交史料館所蔵史料3門8類2項212号『日米間ニ於ケル本邦人結婚効力取調一件』。
- 21) 「クォランチンでの結婚」『やまと新聞』(ハワイ) 1903年6月4日。
- 22) 同上。
- 23) 同上。
- 24) 「呼寄結婚式に就て」『やまと新聞』(ハワイ) 1903年6月4日。
- 25) 同上。
- 26) 1900年ごろまでのハワイの日本人売春婦については, 宮本なつき 「契約移民時代のホノルル日本人社会と日本人売春婦」『比較文化研究』第12号, 2002年10月, 九州大学大学院比較社会文化学府, pp.47-57を参照。
- 27) 港での集団結婚取りやめの経緯については, 拙稿, 「ハワイにおける『写真花嫁』問題—日本政府の対応を中心に」, 『金城学院大学論集』社会科学編, 第1巻第1・2合併号, 2005年3月, pp.180-193, を参照。
- 28) ハワイ日本人移民史刊行教会 『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会, 1964年, pp.175-176。
- 29) Interview of Miyo Asuka, Waikiki, 1900-1985: *Oral Histories*, Vol.II, Oral History Project, Social Science Research Institute, University of Hawai'i, Manoa, June, 1985, p.886.
- 30) Interview of Miyo Asuka, pp.891-892.
- 31) Ibid.

- 32) Interview of Ume Murakami, Waikiki, 1900-1985: *Oral Histories*, Vol.IV, Oral History Project, Social Science Research Institute, University of *Hawai'i, Manoa*, June, 1985, p.1881.
- 33) Interview of Kume Okano, *A Social History of Kona*, Vol.1, Ethnic Studies Oral History Project, Ethnic Studies Program, University of *Hawai'i*, Manoa, June, 1981, p.599.
- 34) Interview of Maki Nakamura, *Stores and Storekeepers of Paia & Puunene*, Maui, vol.I, Ethnic Studies Oral History Project, Ethnic Studies Program, University of *Hawai'i*, Manoa, June 1980, p.198.
- 35) Interview of Osame Manago, *Social History of Kona*, Vol.II, Ethnic Studies Oral History Project, Ethnic Studies Program, University of *Hawai'i*, Manoa, June, 1981, p.1370.
- 36) Ibid., p.1371.
- 37) Interview of Ume Murakami, p.1881.
- 38) 宮下春右エ門, 及び妻ソヨ移民労働契約書, 1900年1月11日付より。
- 39) ゲイル・ノムラ「日系アメリカ女性の歩み」, ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院, 2002年, pp.100-101。
- 40) 中島弓子『ハワイ・さまよえる楽園—民族と国家の衝突』東京書籍, 1993年, p.133。
- 41) 「日本語版序文」より, ロナルド・タカキ (富田虎男・白井洋子訳)『パウ・ハナ ハワイ移民の社会史』刀水書房, 1985年, p.v。
- 42) Interview of Kume Okano, p.604.
- 43) Interview of Kume Okano, p.614.
- 44) ゲイル・ノムラ, 2002年, p.99。
- 45) Interview of Miyo Asuka, p.899.
- 46) Interview of Ume Murakami, p.1883.
- 47) Interview of Maki Nakamura, p.207.
- 48) Ibid., p.207.
- 49) Interview of Osame Manago, p.1374.
- 50) Grady Timmons, "The Last Picture Brides," *Winds*, October 1985, p.40.
- 51) Interview of Tama Teramoto Nishimura, *Lana' I Ranch, The People of Ko'ele and Keomuku*, vol.I, Center for Oral History, Social Science Research Institute, University of *Hawai'i* at Manoa, July 1989, p.253.
- 52) Interview of Tama Teramoto Nishimura, p.255.
- 53) Ibid., p.256.
- 54) Interview of Tama Teramoto Nishimura, pp.256-257.
- 55) 『ハワイ日本人移民史』1964年, p.183。